

## 第2回 四万十川自然再生事業検討会

### 議事概要

令和5年10月24日（火）

14:00～16:15

中村河川国道事務所 別館2階会議室

1. 開会、2. 事務局挨拶、3. 委員紹介を行う。議題と各委員の意見は下記のとおり。

#### （1）前回の委員指摘事項に対する回答

- ・委員からの意見は特になかった。

#### （2）四万十川河口環境の動向について

- ・私の調査では少なくとも四万十川橋（赤鉄橋）までは塩水くさびがみられた。塩水遡上はアユの産卵場とも関係してくる。塩水遡上を明らかにするためには、もっと上流までのデータを示す必要がある。[木下委員]
- ・塩水遡上の調査データについて、下流の表層の塩分がここまで低い値は考えづらい。[木下委員]
- ・水質データは公表されているのか。公表されているのなら、できるだけ情報にアクセスしやすいようにしていただきたい。[平岡委員]

#### （3）スジアオノリ漁獲量と四万十川の水質との関連性について

- ・流量の年変動と全リン、全窒素の関係について分析していただきたい。[木下委員]
- ・四万十川河口域の栄養塩は、海の深層からの湧昇流によって供給されるため、海からの栄養塩の供給も確認していく必要がある。スジアオノリの漁獲量は水温との関係が深い、海から供給される栄養塩の視点も入れて検討していただきたい。[木下委員]
- ・温暖化により海水温が上がっている状況では、河口砂州が再形成されても、スジアオノリの回復は難しい。[平岡委員]
- ・実験室でのスジアオノリの実験によると、水温が高いと葉体から孢子を出し、葉体が消えていく現象が見られる。四万十川でも秋に水温が下がらないと、葉体が孢子を出し、冬の収穫期までに生長できない。[平岡委員]
- ・全体的にみると水温とスジアオノリ漁獲量との相関が圧倒的に強い。水温の上昇により漁獲量が減っているという大きなトレンドを考えると、地球温暖化の影響は避けることはできず、スジアオノリの回復は諦めざるを得ない。[石川委員]
- ・スジアオノリに関しては、本検討会ではどのように進めていくのか。提言していくのか。[石川委員]  
→現在は、これまでのデータを整理して、現状を把握している状況にある。今後、これらの結果を踏まえ、本検討会で議論していくことになる。[岡田会長]

#### (4) コアマモに関する事例紹介

- ・事例1の四万十川でのコアマモ場再生事例について、水温塩分等のデータを提示していただきたい。  
[木下委員]
- ・事例2の京浜運河のコアマモは、四万十川のコアマモとは種類が異なるため、あまり参考にならない。  
コアマモの違いは、葉長でわかる。[木下委員]

#### (5) コアマモに係る水温塩分連続観測結果

##### ■水温・塩分連続観測について

- ・四万十川に近い蛸瀬川（黒潮町）には、コアマモの大きな群落がみられた。また、蛸瀬川に隣接する運動公園の人工のクリーク（入江、水路）にもコアマモ群落がみられた。これらの場所で、調査を実施し、コアマモの生育環境を把握してみてもどうか。大潮時と小潮時に塩分連続観測を実施し、潮位との関係を把握するとよい。四季を通じての調査は必要ない。[木下委員]
- ・蛸瀬川のコアマモは四万十川と同じで新種の可能性が高く、高知県、宮崎県、鹿児島県の一部でのみ確認されている。[木下委員]
- ・資料5の観測データグラフ（p.9～p.12）について、実測値を確認させていただきたい。[木下委員]

##### ■コアマモ生育試験について

- ・第1回検討会で、目標設定を変更してはどうかと発言したが、四万十川でのコアマモ場創出の可能性が見えたため、取り組みを進める価値はある。[石川委員]
- ・実崎ワンドの地盤高をあげても、ワンドの底に高塩分の水が溜まる可能性があるのではないかと。[石川委員]  
→地盤高に伴い塩分が変化するという結果に基づき、検討している。[事務局]
- ・実崎ワンドについて、潮通しをよくして、下げ潮時に底の高塩分の水が抜けるようにしてはどうか。  
[木下委員]  
→一度に複数の改良を行うと、複数の要因が変化するため、一つずつステップを踏んで取り組んでいくことを考えている。[事務局]
- ・T.P.W. -0.9m付近にプランターを置くのであれば、高くなっているワンドの入り口部は問題ない。高さを変えた生育実験の成果は重要な基礎データとなるため、実施に向けて検討していただきたい。  
[岡田会長]
- ・コアマモが生育している場所で同様の生育試験を行い（ポジティブコントロール）、コアマモを確実に生育させることができることを確認しておく必要がある。[平岡委員]

以上